

リスニング能力強化のための実験的指導
 Experimental Teaching for the Reinforcement of Listening Ability
 旭川工業高等専門学校
 Asahikawa National College of Technology
 十河 克彰
 Katsuaki SOGAWA

1. 研究の目的

日本の国際化の進展や産業の空洞化により、高専卒業生が海外勤務技術者として海外に赴く機会が、今後ますます増加すると予想される。したがって、英語の指導目標、指導内容もまた時代の要請や社会の背景から変わらなければならない。つまり、近年の高専英語科教育の使命の一つは、国際社会で英語を手段として活躍できる技術者を英語運用能力の側面からも養成することであろう。

英語で意志伝達するためには、聞く力すなわち相手の意向などを聞き取る能力の習得が不可欠であるが、多くの学生は聞き取りに苦労しているのが実状である。英語を聞き取れない理由の一つとして、音声的には、とりわけ英語母語話者がナチュラル・スピードで話す英語音声と、私達が英語科教育の現場や日本の言語環境の中で実際に接する英語音声は、異質なものであることが挙げられる。音声変理解のために、音韻論的要素を知識として習得させ、その知識を活用し聴解訓練をさせることや、音声変化の音声残像をどのように定着させるかは、聞き取りの成否に関わる重要な指導要素である。したがって、音韻論的知識の指導と音声残像定着化のための音声の暗記についての効果と有効性を探ることは、リスニング能力の強化を図る上で重要かつ必要な研究対象になると思われる。

2. 理論的背景

2. 1 音声変化 談話における英語は、日本の英語科教育に大きな影響を与えたFries(1945)の指摘にもあるように、切れ目のない連続体(the stream of speech)である。談話の中での音声は文字に示されたような音形では決して現れない。この点に関して、島岡・佐藤(1987)は「伝達の手がかりは単音の連続であるが、単音を一つ一つははっきり言う必要はなく、ある時は省略したり、ある時は隣接音と影響し合って一定の流暢さ(fluency)を保って伝達活動がなされる」としている。また島岡(1994)は「実際の談話の流れにおいては、母音や子音の脱落現象、弱形への変化、同化現象による音声変化などさまざまな音形が現れる。綴り字から予測される発音と実際は随分とかけ離れていることが多く、EFL学習者を悩ませるわけである」と述べている。このように、授業の中で教師から口頭提示される英語や英語学習テープ教材は、注意深くははっきりと発音され、速度もかなり遅く設定されているため、発音指導には有益であるが聴解指導には適さない。一方、談話の中での英語音声は、話し手が発声法よりも伝達を重視するため音声変化が生じ、印刷物に書かれてある言葉が理解できても音声からは理解できない状況が起こる。したがって、EFL学習者は、読めても聞き取れない、話せないということになる。

2. 2 トランスクリプトの利用 多くのEFL学習者が今までに習得してきた英語は、速度が遅くははっきりと発音されるため、その音声そのものが、音声変化聞き取りの障害になっているとも考えられる。したがって、EFL学習者はこれまでに学習してきた英語音声と音声変化の含ま

9月6日(土) 研究発表第2室(16号室106)

れる英語音声の差異を理解しなければならない。この際、トランスクリプトを対照させながら英語の音声と綴りの関係や英語特有の音声変化を学ぶ方法は、ただ単に英語の音声だけを頼りに聞き取る場合と比較してより大きな期待ができ、さらに学習者の心理的負担の軽減に有益であろう。

2. 3 音声の暗記 英語を聞き取るためには、まず最初に音声を認知し、その音声残像を確実に記憶に留める必要がある。Palmer(1964)は発話における言語の単位と暗記について次のように主張している。

"...whatever the unit may be, long or short, simple or complex, one thing is clear: each unit has either been memorized by the user integrally as it stands or else is composed by the user from smaller and previously memorized units"

発話は言語の長短、繁簡にかかわらず音声の暗記により可能となる。発話が可能であれば、当然その前提条件となる聴解についても同じことが言えそうである。音声の暗記は日本の外国語学習環境の中で英語音声进行を定着させるための確実な学習方法の一つであるように思われる。

3. 学生の実態

筆者が担当した1年工業化学科39名、電気工学科41名、2年機械工学科36名、制御情報工学科38名、計154名に対して、平成7年10月から平成8年2月までの5カ月間音声変化に焦点をあてたリスニング指導を週1時間実施した。その後、平成8年4月、本校学生のリスニング能力についての実態調査のため1学年から3学年までの全12クラス485名を対象にリスニング能力の測定を試みた。測定のためのテストは財団法人日本英語検定協会平成7年度実用英語技能検定試験準2級、1995-1を使用した。結果は表1及び表2の通りである。

表1 学科学年別得点表(全20問、各1点)

	機械工学科	電気工学科	制御情報科	工業化学科	平均
1学年	8.00	7.77	8.36	8.09	8.05
2学年	7.90	8.58	7.80	7.73	8.00
3学年	8.09	7.36	8.58	8.42	8.11
平均	7.99	7.90	8.24	8.08	8.05

表2 男女別受験者数と平均点

		機械工学科	電気工学科	制御情報工学科	工業化学科
1年	男	45人 8.00	37人 7.76	35人 8.20	21人 7.19
	女		3人 8.00	6人 9.33	20人 9.05
2年	男	41人 7.93	42人 8.60	23人 7.17	28人 7.57
	女	2人 7.50	1人 8.00	17人 8.65	10人 8.20
3年	男	33人 8.09	44人 7.36	36人 8.67	22人 7.95
	女			3人 7.67	17人 8.53

上記実態調査の結果から、次の3点が明らかになった。

1. リスニング能力については、学科・学年に関係なくほとんど能力差は認められない。
2. 女子の被験者数が5人以上のクラスでは、すべてのクラスで女子の平均点が男子のそれを上回っており、男女間におけるリスニング能力の有意差が認められた。
3. 5カ月間のリスニング指導では、十分な実験の有意性は認められなかったが、電気工学科2年と制御情報工学科3年が共に8.58点を獲得し、しかも女子の在籍数がそれぞれ1名と3名であることを考慮すれば、この形態でのリスニング授業の有効性とこれからの実験の意義の確認ができたように思われる。

4. 実験の仮説

関係理論の考察、及びリスニング能力の実態調査の結果から、次の仮説を設定した。

仮説1. リスニング能力は音声変化を認知させ、音声残像を定着させることにより向上する。

仮説2. トランスクリプトの利用は音声変化の理解促進に、音声の暗記は音声残像定着化に有効である。

5. 実験の対象と方法

実験の対象は、前述の旭川工業高等専門学校1学年から3学年までの12クラス485名である。そのうちの第1学年機械工学科45名、制御情報工学科41名と第2学年電気工学科43名、工業化学科41名の計170名を実験群とし、残り315名を統制群とした。実験群には平成8年4月から平成9年1月までの10カ月間、トランスクリプトを使用させ、音声変化の理解と音声の暗記に焦点を当てたリスニング指導を行った。リスニング能力の測定は平成9年1月財団法人日本英語検定協会平成7年度実用英語技能検定試験準2級、1995-2を使用し実施した。実験の有効性については、実験群と統制群の成績比較及び、平成8年4月実施のテストとの成績の推移比較から検証した。

6. 授業の展開

Richards(1983)はpropositionを認識するための知識として、目標言語の統語的知識と背景知識を挙げ、分節が困難な箇所は理解もまた困難であるとしている。したがって、実験の授業構成は(1)プリ・リスニングとしての背景説明と聴解穴埋め問題、(2)トランスクリプト利用時の音声変化や分節区分の記号書き込みと日本語訳の口頭提示、(3)ポスト・リスニングとしてのシャドウイング練習の三部構成とした。ポスト・リスニング時に、シャドウイングを行わせることは、学生の音声残像の確認、予測力の促進に効果があり、ポスト・リスニングの成果があがったように思われる。音声の暗記については、授業の最初に前時のトランスクリプトについて聴解テストを実施することにより、学生は家庭でもテープを聴く動機付けができ、トランスクリプトの音声を暗記してくるようになった。聴解テスト後の音声残像やトランスクリプトの意味内容が記憶に残っている状態でのリスニングでは、学生は音声の速度を遅く感じる等の効果が見られた。

7. 実験の結果

実験の結果は下記表3の通りである。実験群、統制群を問わず、すべての学科・学年において2回目のテストで、成績の向上が見られた。また、総じて学科・学年間のリスニング能力の有意差は認められなかった。したがって、リスニング指導だけが、特にリスニング能力の向上に貢献したと

9月6日(土) 研究発表第2室(16号室106)

は考えにくい。しかし、実験群は学年別で見ると、統制群に比して高得点を獲得し、2年生の実験群2クラスについては有意差が確認できたように思われる。

表3 得点の比較とその推移

1年生	機械工学科	電気工学科	制御情報工学科	工業化学科
1回目	8.0	7.8	8.4	8.1
2回目	12.2	11.5	12.9	11.3
2年生	機械工学科	電気工学科	制御情報工学科	工業化学科
1回目	7.9	8.6	7.8	7.7
2回目	11.6	13.4	12.6	13.1
3年生	機械工学科	電気工学科	制御情報工学科	工業化学科
1回目	8.1	7.4	8.6	8.2
2回目	12.1	10.9	12.0	12.1

表4 指導案

T	Process	Students' Activities	Teacher's Activities	Remarks
5	Listening Test	Listen to the tape and answer the questions	Let the students have the listening test of the previous lesson	
15	Stage 1 Pre Listening	1. Listen to the teacher's explanation 2. Listening for gist 3. Answer the questions	1. Give the students contextual explanation 2. Have the students listen to the tape of today's lesson 3. Ask the questions on the contents	Advise students to try to grasp the meaning or contents of the skit
20	Stage 2 Individual Listening	1. Listen to the teacher's translation and explanation 2. Individual listening practice	1. Brief translation into Japanese with minimum explanation of sound units and grammar when necessary 2. Check and support the individual practice	Translation should be used simply as a comprehension aid and check
5	Stage 3 Post Listening	Shadow / follow the tape	Encourage the students to shadow / follow the tape	Without looking at the transcript

参考文献

1. 島岡・佐藤(1987), 最新の音声学・音韻論, 研究社, p.62.
2. 島岡(1994), 中間言語の音声学, 小学館, p.103.
3. Fries, C.C.(1945), *Teaching and Learning English As a Foreign Language*, University of Michigan, p.3.
4. Palmer, H.E.(1964), *The principles of language-study*, Oxford University Press, p.116.
5. Richards, J.C.(1983), "Listening Comprehension: Approach, Design, Procedure.", *TESOL Quarterly*, Vol. 17, No.2, June, pp. 219 - 240.
6. Underwood, M.(1989), *Teaching Listening*, Longman, p.9.
7. Ur, P.(1984), *Teaching Listening Comprehension*, Cambridge University Press, pp.51 - 53.